

「探究道場」スタッフ各位

『探究道場サミット』 議事録

第八代渉外班副班長

坂本穰

1. 会議名

『探究道場サミット』（以下本サミット）

2. 日時・場所

2026 年 8 月 2 日 8 時 30 分～12 時 00 分 本能館 PH1・PH2

3. 参加者

井上ニコ・河原将人（議長）

全国組織「探究道場」の各校の代表

4. 目的

全国組織「探究道場」の活動方針を決定することを目的とした。

5. 採択事項

本サミットの決議案として，“幹部校制度”の案が採択された。

本制度では、幹部校が主に以下のような活動を行う。

- ・他の学校に対するワークショップの指導や、ファシリテート講習会の運営等
- ・自校のワークショップの評価・改善

また、幹部校制度を実施するにあたり、制度の試験運用を行う。

この試験運用では、

- ・連携校が幹部校となる条件を決める。
- ・幹部校が他校を指導できるように、堀川が指導し、幹部校間で連携を活発に行う。

ただし本決議を実現するために必要な議論に関し、堀川高校が改めて協議の場を設けることとする

6. 語句の定義

本議事録では規準及び基準のことを「キジュン」と表記する。

規準（ノリジュン）：目標が達成されている理想的な状態のことをくわしく表記したもの。

基準（モトジュン）：行動や数値で規準の達成度合いをはかるもの。

7. サミット会議の流れ

議長：本サミットでは、参加校から議題と決議案を募り、それについて話していく。そのため、各校が話し合いたい議題と決議案を考える時間をはじめに取る。考える体制として、いくつかのグループに分かれて話し合うこと。

7.1. 堀川高等学校による“「探究道場」ミライ会議”についての提案

堀川：連携初年度の高校が多いことから、共通認識を形成するため、連携年数及びスタッフ人数を基準に二つのグループに分かれることを提案する。連携年数及びスタッフ人数が多い連携校は“「探究道場」ミライ会議（以下本会議）”に参加し、連携年数やスタッフ人数が少ない連携校は、「探究道場」の運営に関する不安や課題について話し合う。本会議への参加校は、宮城野、立川、西武、津及び諫早高校とする。

7.2. 堀川高等学校の提案について質疑応答

成蹊：堀川の提案についてはおおむね賛成である。しかし、連携年数やスタッフ人数が少ない高校のみで議論すると限界があるため、連携年数やスタッフ人数が多い高校からも代表者を残すことを求める。

堀川：堀川から代表者が一名残るため、その心配はない。

津：本会議での議論内容は、全連携校に共有されるのか。

堀川：本会議で得られた結論は、決議案として全連携校に共有する。その後、本サミットにおいて、本会議での結論を採択するかどうかについて決議を行う。

7.3. 堀川の提案に対する決議

賛成 17, 反対 0, 棄権 0

出席校の過半数の賛成により堀川の提案が採択された。

8. PH1 で行われた「探究道場」に関する不安や悩みについての共有会

8.1. 探究へのイメージについて

共立女子：探究が校内に広まっておらず探究に対して固いイメージがある。そのため、スタッフ人数や参加中学生が少ない。

成蹊：「探究をします」と言ってしまうと固い雰囲気形成されてしまう。テーマを如何にたのしそうに伝えるかが大事である。そうすると、「探究をします」といった場合よりも柔らかい雰囲気が形成される。

8.2. ワークショップの企画立案の方法と、初回開催の適切なテーマについて

京都先端：企画案の立案はどのようにしているのか。また、初回開催ではどんなものをテーマにして行ったほうが良いのか。

堀川：スタッフの興味・関心等を Padlet で意見を集め、対面班というワークショップ準備を行う班の幹部がいくつか候補を絞る。絞ったテーマで予備実験を行い、最終的に、中学生がたのしめるかどうかを観点に選んでいる。初回開催にすべきテーマというのは、現時点では明確な知見を有していない。

8.3. ワークショップの計画、スタッフのモチベーション、ファシリテート能力育成について

西宮東：①ワークショップ準備の時間の過不足がない計画を立てる際に気を付けていること

は何か。

②高校生スタッフのモチベーション維持のために何をしているのか。

③高校生の探究への理解が浅く、ファシリテート力がない。どうすれば、ファシリテート力がつくファシリテート講習会の運営ができるのか。

堀川：① 堀川内で毎年決まりきったスケジュールで動いている。そのため、共有できる特別な工夫は特にない。

西舞鶴：②「探究道場」の活動に対して、真面目に取り組めばサミットに行けることをアピールし、スタッフのやる気を引き出している。

堀川：③ ワークショップ全体の評価・改善を行っている研究班がファシリテート講習会の設計を行っている。

議長：「探究道場」を一つの組織として位置付けることを宣言したのは、今回のサミットが初めてである。そのため、「探究道場」やファシリテートの意味に関する質問でも構わない。まずは、「探究道場」について疑問点を解消した上で議論を進めることを提案する。

8.4. 各参加校の探究活動について

高崎女子：学校では探究をたのしいものとして紹介している一方で、探究活動では教員から厳しい指摘を受けることが多く、探究をたのしいと感じられない。このギャップはどのように解消すればよいのか。

議長：学校側の環境は生徒だけで変えることは難しい。探究のたのしみ方を知りたいということか。

高崎女子：たのしみ方というよりも、高校に入学する中学生にギャップを感じてほしくない。他の連携校がどのように探究活動を進めているのかを知ることで、改善につながる可能性があるため、ご教示願いたい。

堀川：入学直後に二日間の探究活動「DIVE」を実施し、一年生前期には自分の興味・関心を知る「HOP」、後期には興味・関心に基づいてゼミに分かれる「STEP」、その後、ゼミ内で個人探究を行う「JUMP」を実施している。最後に、本能館で個人探究の成果発表を行う。このような流れで探究活動を進めている。主観ではあるが、堀川の生徒は、自分の興味を他者に表現することを好み、得意としている。また、自分の興味分野について学び、さらに応用的な内容へ発展していく過程にたのしさを感じていると考えている。

沼津：個人探究と班探究のいずれかを選択できる。個人探究では自ら問いを設定できるが、班探究では教員から与えられたテーマをもとに校外学習を行い、そこから問いを設定して探究する。課題として、探究とは何かを十分に理解しない段階から活動を始めるため、探究をたのしいと感じにくいことや、教員から取り組まされているという意識が強いことが挙げられる。

成蹊：他者の興味・関心を否定せず受け止めることを大切にしている。また、ワークショップ

では高校生のみの班を設け、高校生自身がたのしく探究できる環境を整えることで、全体の雰囲気を柔らかくしている。

京都先端：主観ではあるが、探究に主体的に取り組もうと考えるようになったきっかけは、キャリア甲子園で準決勝に進出したことである。その際に得た率直な評価が大きな励みとなっている。

徳島市立：興味のある分野ごとに探究活動を行っている。企業など外部組織と関わる機会が多く、生徒の探究への意欲は高い。

西宮東：探究に関心の高い生徒が学科に集まっているため、探究への意欲は高い。また、探究活動のきっかけづくりには、工作やキャッチフレーズなどが重要である。

旭川西：探究活動の成果を一年生、二年生、三年生及び外部の方に五段階で評価してもらい、その結果をランキング化している。上位者は札幌などで発表を行っている。

共立女子：個人探究とグループ探究の両方を実施している。大学と連携して探究活動を行い、大学生から意見をもらうことがモチベーション向上につながっている。外部の方から探究内容について意見をもらう機会を設けることを提案する。

西舞鶴：一年生は学校実習の中で探究活動を行い、二年生では自由なテーマで探究活動を行う。大学教員などから探究内容について意見をもらい、対等に議論できることがモチベーションにつながっている。

舟入：学校全体で探究祭に向けて取り組んでいる。一年生は探究道場を実施し、二年生はグループで問いを設定して探究を行い、探究祭で成果を発表する。一方で、一年生はFWを基に探究道場を作成するため、自分の取り組みたい内容を必ずしも実施できない。また、二年生もグループで決定した問いが個々の興味と一致しない場合があり、積極的に探究活動へ取り組めない生徒がいることが課題である。

時習館：一年生では個人探究、二年生では班探究を実施している。二年生の探究成果は三年生で二年生へ発表している。また、SSH探究講演会で講演を聞く機会や、探究コースの生徒が探究道場や海外研修へ参加する機会を設けている。探究コースに入りたいという意欲が、探究活動へのモチベーションにつながっている。

8.5. 「探究道場」の目的・目標について

議長：「探究道場」について十分に理解できていない高校はないだろうか。

議長の呼びかけに対し、京都先端、高崎女子及び旭川西がプラカードを掲げた。

議長：「探究道場」とは何をする組織だろうか。

京都先端：ワークショップを開催する組織である。

議長：では、なぜ「探究道場」はワークショップを開催しているのか。

西宮東：準サミットでは、高校生の探究力を伸ばすためにワークショップを開催していると聞いた。西宮東では、企画・運営を通して、たのしく考える力を育むことを目的としている。

議長：「探究道場」の目的は、他者との協働を通して探究活動を設計・実行できる人材を育成することである。その目的を達成するための取組の一つとして、中学生を対象とし

たワークショップを実施している。探究活動は、予測困難な未来に対応する力を育むものとして高校教育でも重視されている。しかし、現状では高校現場において教員の約8割が探究教育を十分に実施できていないという課題がある。

そのため、高校生自身が探究活動を実践する機会を持つことが重要である。高校生が中学生に探究を伝え、ワークショップを設計・実施する過程で、自らの探究への理解を深め、探究活動を設計・実行する力を高めることができる。また、中学生は高校入学前に探究活動を体験することで、高校での探究教育へ円滑に取り組むための基盤を形成できる。さらに、高校生が探究教育の一端を担うことで、教員の負担軽減や探究教育の充実にもつながる。

以上のことから、ワークショップには、高校生の探究活動を設計・実行する力の育成、中学生が探究に触れる機会の提供及び教員への探究教育支援という三つの意義がある。

京都先端：探究とは、答えのないものに対して行うものか。

議長：答えが複数存在するものに対して行うものである。

共立：対象を掘り下げることが探究だと考えている。そのため、答えのないものも探究に含まれるのではないか。

堀川：探究という言葉の意味は非常に広い。ワークショップでは、中学生がゴールを見据えて活動できるよう、答えが複数存在するテーマを扱っている。また、ワークショップでは探究サイクルに基づいた探究を実践しているが、すべての探究が探究サイクルに基づくわけではない。ワークショップでの探究体験に再現性を持たせるため、探究サイクルを用いている。

旭川西：各校が開催したワークショップは「探究道場」内で共有されるのか。また、過去にどのようなテーマでワークショップを実施したのか、ご教示願いたい。

議長：堀川はZoomやDiscordを用いて連携校と定例会を実施し、各校のワークショップの進捗状況を共有するとともに、互いに質問し合っている。現状では、連携校のワークショップは堀川が一括して管理しているため、連携校同士が交流する機会として、今回のようなサミットを設けている。

過去のワークショップの例として、今年度第1回は「瓦プロジェクト」、昨年12月は「商品開発プロジェクト」を実施した。「瓦プロジェクト」は計算式などからある程度答えを絞ることのできる理系プロジェクトであり、「商品開発プロジェクト」は決まった答えのない文系プロジェクトに位置付けられる。

8.6. ワークショップ準備の体制について

沼津：9月にワークショップを実施予定であるが、役割分担や準備の進め方が定まっておらず、組織内のコミュニケーションもうまく取れていない。

西宮東：師範、涉外班、理論班、工作班、スライド班などに分かれて活動していたが、経験が浅かったため、班の垣根を越えて活動していた。

舟入：西宮東とは準備体制が異なり、師範がスライド及び発表原稿を作成している。ワーク

ショップ準備では、複数のテーマ案を出し、教員から助言を受けてテーマを決定する。その後、理論を組み立て、その内容を基にスライドを作成している。

議長：舟入と西宮東の組織構成人数を共有していただきたい。

舟入：二年生 6 名，一年生 2 名で活動している。

西宮東：二年生 7 名，一年生 10 名程度で，全体では 20 名弱で活動している。

時習館：二年生 11 名，一年生 2 名，三年生 1 名が引継ぎとして参加し，全体で 14 名が活動している。統括，渉外班及び実験班に分かれているが，全員がスライド作成，実している。

成蹊：二年生 2 名，一年生 1 名で活動しており，役割分担は行っていない。沼津は何人で活動しているのか。

沼津：20 名程度で活動している。

議長：想定より人数が多いため，大人数で活動している堀川に説明をお願いしたい。

堀川：約 40 名で活動しており，渉外班，対面班，研究班に分かれている。班分けは入門説明会で第一志望から第三志望まで希望を取り，希望を基に振り分けている。対面班はワークショップ準備を担当し，班内でもチームに分かれて活動している。渉外班は連携校との連携を担当し，研究班はワークショップの独自開催に向けた評価・改善を担当している。また，各班には班長と副班長を置き，さらに統括・副統括と各班の班長・副班長で構成される幹部会，その上位組織として統括・副統括で構成される統括会を設置している。

8.7. ワークショップの広報について

共立：ワークショップに中学生を集めるため，どのような広報を行っているのか。

舟入：中学校にポスターを設置している。スタッフ募集については，入学後一か月以内の一年生を対象にワークショップを実施している。

西宮東：スタッフは直接声をかけて募集している。昨年度は中学校にポスターを掲示してもらっていたが，今年度からは困難となったため，ホームページで募集を行っている。

西舞鶴：理数探究科の生徒を中心に，教員志望の生徒や実験に興味のある生徒が参加している。

成蹊：放送朝礼や Teams で探究道場スタッフを募集している。また，受験生の保護者がよく閲覧するホームページに探究道場の案内を掲載し，中学生を募集している。

旭川西：学校公式の Instagram で探究道場を広報し，DM を通して中学生からの質問に対応している。

堀川：ポスターをキャッチーなデザインにすることで，中学生の興味を引いている。

8.8. ワークショップに参加する中学生の人数について

高崎女子：何人を目安に中学生を募集しているか。

西舞鶴：オープンスクールで 8 人の中学生がワークショップに参加した。

応

舟入:オープンスクールで20人の中学生がワークショップに参加した。去年の11月は30人弱が来校しワークショップに参加した。

堀川:前回は60人の中学生がワークショップに参加した。参加中学生が100人を超える会もあり、

募人数が多い場合は抽選を行っている。

8.9. 組織での協働について

徳島市立:授業の一環で探究道場を行っている。男女比に偏りがあり、コミュニケーションがとれていない。どのようにすれば、男女間でコミュニケーションができるのか。

舟入:Google Formで各員の意見を募集している。知らない人と集まることを前提に行っているの
で、自発的にコミュニケーションをとることを心掛ける雰囲気がある。

西宮東:カードゲーム等をして仲を深めている。仲良くなりたいのは誰でも同じではないか。

8.10. PH2で行われた「探究道場」ミライ会議について

会議の録音ができなかったため、議事録を作成できなかった。

9. で書かれているのは「探究道場」ミライ会議後のサミットにて共有された内容及び、その質疑応答である。

9. 「探究道場」ミライ会議で話し合われた議題と決議案について

「探究道場」ミライ会議が終了し、探究道場について悩みや不安を話し合っているグループと合流した。

9.1. 議題と決議案についての説明

堀川:本会議では、「ワークショップの独自開催を実現するためにどうすればよいか」という議題について議論した。「探究道場」ミライ会議では、その方策として幹部校制度を提案した。幹部校制度では、連携年数及びスタッフ人数を基準に幹部校を選定し、これまで堀川高等学校が連携校に対して行ってきたワークショップへの助言等を、幹部校が担う。また、幹部校は自校のワークショップの評価・改善を行うとともに、校内で反省会を実施する。

幹部校制度の導入により、幹部校は自らの活動を言語化する機会を得られる。また、幹部校同士や、各校の研究班同士が意見交換を行うことで、相互に学び合い、高め合うことが期待される。

9.2. 幹部校制度に対する質疑応答

京都先端:ワークショップを評価・改善するための評価キジューンは、どのように決定するのか。

堀川:担当する幹部校が設定した評価キジューンに基づき、ワークショップの評価・改善を行う。

高崎女子：幹部校による連携校への支援は、Zoom 形式で行うのか、それとも現地で行うのか。

堀川：現地での実施が望ましいが、距離等を考慮し、Zoom で対応する。

成蹊：幹部校とそれ以外の連携校との間に確執が生まれるのではないかな。

堀川：幹部校制度は、全国組織「探究道場」における役割分担であり、幹部校とそれ以外の連携校との間に確執が生じないよう運営する。

諫早：幹部校が他の連携校に対してファシリテート講習会やワークショップへの助言を行うには、まず自校単独でワークショップを開催できるようになってからではないかな。幹部校制度自体を否定するわけではないが、「ワークショップを独自開催するにはどうすればよいか」という議題に対する解決策になっていないのではないかな。

堀川：ワークショップの独自開催自体は可能である。しかし、「探究道場」が求める質を担保して実施することは容易ではない。他者に教えるためには、自らの活動を言語化する必要があり、その過程で自身の探究活動への理解が深まる。したがって、他の連携校へ活動内容やワークショップの開催方法を伝えることが、「探究道場」が求める質を担保することにつながる。

西宮東：各高校には得意・不得意があるため、幹部校制度ができれば、幹部校以外の高校同士も交流を深められるのではないかな。

堀川：宮城野が実施しているサミットを参考にしたものであり、そのような取組を共有しながら進めていきたい。

西舞鶴：幹部校はスタッフ人数と連携年数を基準に選定するとしているが、生徒の能力は連携年数とは関係ないのではないかな。

堀川：幹部校制度を実施するには一定の人数が必要である。また、ワークショップ開催のノウハウが継承されることから、連携年数は生徒の能力とも関係している。幹部校制度では他者に教える経験を通して指導のノウハウが蓄積され、後輩にもより多くの知識や経験を伝えられるようになって考えている。

立川：補足する。幹部校では、自校でファシリテート講習会を実施し、二年生が一年生を指導することで、他の連携校へ指導できる力を育成していく。

西舞鶴：幹部校は能力向上の機会を得られるが、幹部校以外の連携校にとってのメリットは何か。

立川：連携校が増加すると、堀川だけでは十分な指導が難しくなる。そのため、幹部校が指導を担うことで、各連携校への支援を充実させることができる。当初は指導力に差があるかもしれないが、経験を重ねることで、将来的には堀川と遜色ない水準を目指す。

西舞鶴：つまり、連携校が大幅に増加した際に生じる指導不足を解決するための制度という

ことか。

議長：立川は、西舞鶴のどの質問に対して回答していたのか。

立川：「幹部校は連携年数で選定しているが、生徒の能力とは関係ないのではないか」という質問に回答した。一年生は経験が浅いが、二年生がファシリテート講習会を通して指導することで能力を高め、十分な水準に達した後に連携校への指導を担うことを想定している。

西舞鶴：つまり、幹部校の一年生の負担が大きいということか。

堀川：新たな連携校を受け入れられなくなる事態を防ぐことも目的の一つであるが、幹部校制度は、あくまで全国組織「探究道場」全体の成長を目指す取組である。

9.3. 諫早高等学校の内容追加について

諫早：「探究道場」全体の力の底上げという観点では良い提案だと考える。しかし、現状では能力向上の対象が幹部校のみとなっており、教えられる側のメリットが十分ではない。現在の幹部校は、堀川と同等の指導ができる水準には達していないため、まずは幹部校同士が連携して力を蓄える期間を設けるべきではないか。

堀川：探究活動の成果を定量的に評価することは難しい。探究活動とは、既存の知識を組み立てたり分解したりする経験を通して、必要な知識の活用方法や結論の導き方を学ぶものである。堀川は、そのために必要な最低限の知識を幹部校へ共有し、幹部校による指導が堀川の水準と変わらないものとなるよう支援する。

津：幹部校を選定する評価キジューンを明確に定めるべきではないか。

堀川：連携年数及びスタッフ人数を基準に幹部校を選定する。連携校の増加に伴い、幹部校も増やしていく。

時習館：先ほど独自開催は可能であるとの説明があったため、議題に対する結論としては特に新たな取組は必要ないのではないか。

堀川：今回の議題は「ワークショップを独自開催するにはどうすればよいか」であるが、会議の目的は、「探究道場」をより良い組織にすることであり、そのための議論を行っている。

成蹊：幹部校に関する議論が一部の高校のみで行われたため、他の連携校は十分に理解できていない。幹部校とは、堀川と密に連携し、安定してワークショップを開催できる高校という認識でよいのか。また、その場合、幹部校とそれ以外の連携校との間に上下関係が生まれないか。

堀川：幹部校制度は、堀川と他の連携校との間に上下関係を作るものではない。

議長：体調不良により、堀川の代表を鳥本から廣澤へ変更する。

諫早：幹部校制度の代案として、まず幹部校同士が教え合い、能力を高める期間を設けてはどうか。その間は堀川が連携校への指導を担い、幹部校が十分な指導力を身に付けた段階で幹部校制度へ移行することを提案する。

堀川：代案の提案に感謝する。堀川としても、幹部校制度を直ちに実施することは難しいと考えており、試用期間を設けたいと考えている。諫早の提案は、幹部校の能力向上と、幹部校としての評価キジュンの策定を同時に進めるという理解でよいか。

諫早：そのとおりである。

議長：諫早の提案は内容の追加に当たるため、採決を行いたい。

西宮東：幹部校同士で能力を高め合うことに加え、堀川の支援の下で幹部校以外の連携校とも関わることで、段階的に指導を進めていく方法がよいのではないかと。

諫早：負担が増え、ワークショップ準備に支障が生じることが予想されるため、賛成しかねる。

議長：西宮東は、同時並行で進めることを提案したということか。

西宮東：同時並行という意味ではない。幹部校同士で能力を高めるだけでなく、堀川の支援を受けながら幹部校以外の連携校とも関わり、段階的に指導を行うべきではないかという提案である。

諫早：連携初年度の高校への指導は難しいため、まずはある程度基礎が身に付いている連携校への指導を通して幹部校の能力を高め、その後に連携初年度の高校への指導を担うという段階を踏みたい。

堀川：幹部校同士の高め合いとは、具体的にどのような内容を想定しているのか。

諫早：幹部校を対象にファシリテート講習会や定例会を実施し、各幹部校から一名ずつ評価担当者を置き、講習会のフィードバックを共有することを考えている。

堀川：ファシリテート講習会の評価キジュンを作成する見通しはあるか。

諫早：幹部校内だけでなく、他の幹部校や堀川と協力して作成していきたい。

堀川：試用期間中に評価キジュンを作成し、その策定方法も確立していきたい。

議長：他に意見はないか。

他に意見は出なかったため、採決に移った。

9.4. 諫早高等学校の内容に追加についての決議

賛成 16 校、反対 0 校、棄権 1 校（西舞鶴）。

出席校の過半数の賛成により、諫早高等学校による内容追加は採択された。

9.5. 幹部校制度の最終確認について

議長：時間が限られているため、決議案全体の採決に移る。

議題

「ワークショップを独自開催するにはどうすればよいか」

決議案

幹部校制度を導入する。本制度では、幹部校が主に以下のような活動を行う。

- ・他の学校に対するワークショップの指導や、ファシリテート講習会の運営等
- ・自校のワークショップの評価・改善

また、幹部校制度を実施するにあたり、制度の試験運用を行う。

この試験運用では、

- ・連携校が幹部校となる条件を決める。
- ・幹部校が他校を指導できるように、堀川が指導し、幹部校間で連携を活発に行う。

ただし本決議を実現するために必要な議論に関し、堀川高校が改めて協議の場を設けることとする。

立川：認識に齟齬が生じている可能性があるため、確認したい。

幹部校制度は、ワークショップを独自開催するための手段として考案された制度である。幹部校が他の連携校に対してファシリテートや師範練習を指導することで、「教える経験」を蓄積し、将来的には堀川の支援がなくてもファシリテート講習会や師範練習会を開催できるようになることを目的としている。また、幹部校は堀川から受け継いだ師範やファシリテートの基礎を連携校へ伝えることで指導経験を積み、連携校は堀川と同等の指導を受けられる。なお、幹部校と連携校の二年生との間に能力の優劣はなく、違いはこれまで蓄積してきたノウハウにある。

堀川：幹部校制度は現在構想段階にある。今後も皆さんと議論を重ねながら、制度の実現に向けて検討を進めていきたい。

9.6. 幹部校制度に対する決議

賛成 15 校, 反対 0 校, 棄権 2 校(西舞鶴、成蹊)

出席校の過半数の賛成により、この決議案は採択された。